

過去から今をそして、未来を…自分を…

角間川の物語



大仙市立角間川小学校

目 次

I 角間川給人と新田開発

- 1 角間川の位置がもたらした恵み 1
 - (1) 考えてみよう「角間川の位置がもたらした恵み」は？
 - (2) 角間川の位置がもたらした恵み
- 2 角間川への武士の移住と新田開発 3
 - (1) 小野寺氏の旧家臣たちの角間川移住
 - (2) 新田開発を進めた 黒沢甚兵衛と八木藤兵衛道広
 - (3) 新田開発の進展
 - (4) 角間川給人を率いた八木藤兵衛
- 3 角間川給人の生活 9
 - (1) 角間川の鮭漁
 - (2) 不安定だった鮭漁
 - (3) 横手給人との鮭争い

II 角間川地主とその役割

- 1 本郷家の興り 11
 - (1) 本郷家のはじまり
- 2 本郷家の商売 13
 - (1) 本郷家の初代と二代目のころ
 - (2) 各地とつながる商売
- 3 秋田角間川の商人 16
 - (1) 秋田角間川の商人
 - (2) 秋田角間川の商人へ ～大阪でも知られた角間川の商人～
資料 雄物川水運図

III 角間川の偉人たち

- 1 角間川の聖人 落合東堤 21
 - (1) 落合東堤先生
 - (2) 角間川へ戻って
 - (3) 守拙亭

(4) 角間川の聖人東堤先生

2	角間川郷校と関口兼三	24
	(1) 秋田と江戸で学ぶ	
	(2) 秋田へ、そして郷校開校	
	(3) 郷校のその後と関口兼三	

IV 角間川盆踊りの歴史

1	ソソリコ（盆踊り）から仁輪伽へ	26
	(1) 江戸時代の盆踊り	
	(2) 明治の頃からの盆踊り	
2	藤田庄八のがんばりと角間川盆踊りの誕生	28
	(1) 角間川盆踊りの元祖 藤田庄八	
	(2) 角間川盆踊りの誕生	
	(3) 第1回角間川盆踊り大会への開催へ	
	(4) 角間川盆踊りの広がり	

資料 角間川の歴史年表

「角間川の物語」作成にあたって

元号が令和と改元され、世では盛んに「平成とは」が問われ、昭和が歴史として語られるようになっていく感じがします。この「角間川の物語」を作成するきっかけは、かつせい角間川かきようぎかい活性化協議会の佐々木さんとのお話からでした。

旧本郷家の本格的な改修かいしゅうが始まり公開が行われ角間川小の子どもたち全員が見に行きました。あんない案内の方の説明を聞きながらの見学でしたが、子どもたちは説明を聞くための基礎的な情報きそてきが乏しいため理解りかいすることが難むずかしかったようでした。

そのことを佐々木さんに話しました。佐々木さんは「小学生や中学生の親たちが角間川の歴史れきしを知らねものな。」「このままだと角間川の歴史を話せる人がいなくなって、しよもつ書物の中だけの歴史になってしまうかもしれません。」とおっしゃいました。

今、子どもたちが角間川の歴史を学ばなければ、佐々木さんのおっしゃったことはさらに深刻になってしまったと思いました。子どもたちが角間川の歴史を学び角間川のよさやすばらしさにふれ、それを伝えることができるようになって欲しいと思いました。角間川小で学ぶ意味がここにあると思いました。

その後、子どもたちに角間川の歴史を学ばせるためにはどうしたらよいのか考えました。角間川の歴史にくわしい方に学ぶことも考えられます。しかし、この方法は時間を設定せっていするなどがむずかしく、継続して行うことができないなどの問題があります。そこで、「子どもたちが自分で学べる方法はないだろうか。」と考えました。小学生向けの読み物がよいのではないかという結論けつろんに行き着き、作成に取りかかりました。

子どもたちが自ら調べて考え、角間川の歴史を学びながら友だちと意見を交わし、深い学びができることを願って作成しました。ここで言う深い学びとは、角間川に残ることに意味を見いだしたり、角間川の歴史と自分のつながりに気付いたりすること、そして、それを表現することです。角間川の歴史と自分の物語をつなげる学びとなることを願い「角間川の物語」と名付けました。

この物語は一応の完成です。今後に続く先生方と子どもたちでこの物語を修正しゅうせいしたり付け加えたりしてくれることも願っています。また、学びに用いた教材や学びを表現した作品などの学びの足跡を角間川小学校や角間川町の財産として残してほしいと願っています。

令和元年 6月

角間川きゆうにん給人いと新田開発

1 角間川いの位置ちがもたらした恵み

(1) 考えてみよう「角間川いの位置ちがもたらした恵み」は？

まず、はじめに角間川いの位置ちについて確かくにんしておきましょう。下の図1を見ても分かるように、角間川いは仙北平野せんぼくへいやのほぼ中央ちゆうおうに位置いし雄物川おものがわと横手川ひらかぐんが合流する土地せんぼくぐんに位置いしています。また、平鹿郡ひらかぐんと仙北郡せんぼくぐんをつなぐ場所はんえいでもありました。このような土地いに位置ちしていることは、角間川いが繁栄はんえいするためにたいへんありがたいことでした。



どうして、ありがたいことだったのでしょうか。
ヒントと図1を参考にして考えてみましょう。

<考えるヒント>

- 新しく水田を開発するためには何ひつようが必要ひつようでしょう。
- 2つの川があるとどんな便利べんりなことがあるのでしょうか。
- 江戸時代初めのころは、まだ武士同士かとうせいの争いかとうせいが起こる可能性かとうせいがありました。
- 雄物川を下ると久保田の城下町つちざきみなと（今の秋田市）や土崎港つちざきみなとを通って青森、京都など日本各地とつながることができました。



【図1 空から見た角間川町】

(2) 角間川の位置がもたらした恵み

角間川の位置がもたらした恵みは大きく三つあります。

まず一つ目は、新たな水田の開発がいくぶん行いやすかったということです。角間川は雄物川と横手川が合流する場所にあります。水田を開発するのは大変な労力とお金を必要とすることでしたが、他の場所に比べるといくらか容易にかんがい（水を水田に引くこと）することができました。2つの川が合流することと平らな土地が広がっていることが結びついて新田開発が進められていきました。かんがい容易だとは言え、新田開発はすべて人の力で行ったのですから今とは比べものにならないくらい大変なことでした。

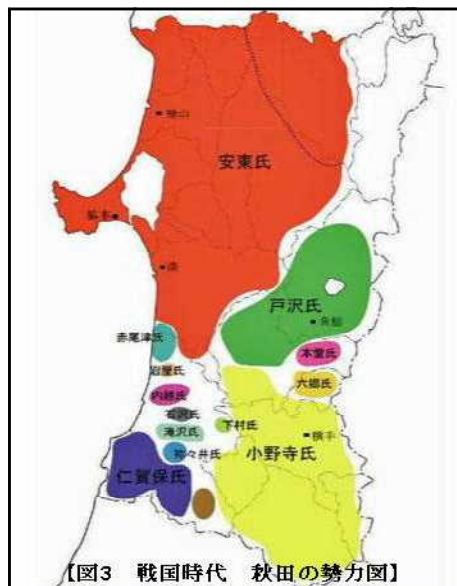
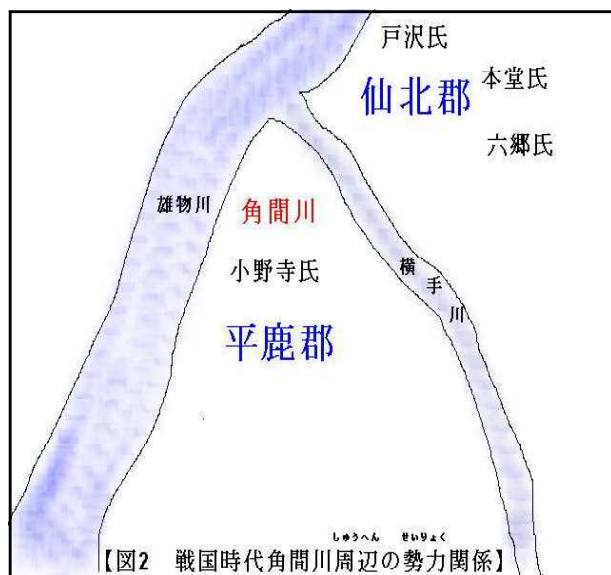
二つ目の恵みは、二つの川を支配することができたということです。江戸時代、川は物資を大量に運ぶ重要な役目をもっていました。そのため、武士たちにとってこの二つの川を自由に使えることは経済、戦い、交通にとって大変重要なことでした。

三つめの恵みは、仙北郡と平鹿郡の境に位置していたので、両方の郡の物資や人が行き交うことができたということです。仙北郡と平鹿郡ではそれぞれちがう種類の産物があったので、角間川に集まる産物の種類や量が豊富になります。また、二つの川で物資を運ぶので、一つの川より行き先も広がります。角間川は栄える条件をそなえていたということです。

これらの恵みのため、角間川は多くの大名たちが支配したい土地でした。戦国時代には、平鹿郡を支配していた小野寺氏と仙北郡を支配していた戸沢氏・本堂氏・六郷氏との間に角間川の恵みを巡って争いがしばしば起きていました。(図2・3)



あなたは、この角間川の位置がもたらした恵みについてどう思いましたか。友だちと意見交換してみましょう。



2 角間川への武士の移住と新田開発

(1) 小野寺氏の旧家臣たちの角間川移住

関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利して将軍となり、100年近く武士が争い続けた戦国時代が終わり江戸時代が始まりました。世の中は争いが収まり平和になりました。家康は常陸国（今の茨城県）を治めていた佐竹義宣を秋田に移住させ治めるよう命令しました。



【徳川家康】

それまで、角間川をふくむ横手・湯沢地域一帯を治めていたのは小野寺氏でした。(図3) 小野寺氏は徳川家康の命令に従わず関ヶ原の戦いに参加しませんでした。そのため小野寺氏は中国地方の津和野（島根県）に移住を命じられました。小野寺氏に従っていた武士たちは混乱しました。小野寺氏が移住を命じられた津和野はあまりにも遠く、条件も悪かったからです。ある者は命令に従って移住しました。また、ある者はできるはずもありませんが反抗しようとしてしました。その中で72人の旧家臣（※1）をふくむ浪人（※2）たちは新しく秋田を治めることとなった佐竹氏に従うことと家来として横手に残ることを願い出ました。佐竹義宣はこの願いを聞き入れ給人（※3）として、角間川に移住するよう命じました。



【佐竹義宣】



【図4 佐竹氏がやってきた常陸国の位置と小野寺氏が移された津和野の位置】

- ※1 家臣 大名の家来の中で重要な役わりをもつ人
- ※2 浪人 仕える主人が定まっていな武士
- ※3 給人 大名に仕え、大名が土地を治める仕事を支えた武士。大名から身分に応じて給料を与えられていた。角間川の給人は自分で開発した新田からのお米を給料として与えられた。



左の地図で津和野・常陸国と横手の距離を測ってみましょう。

(2) 新田開発を進めた 黒沢甚兵衛と八木藤兵衛道広

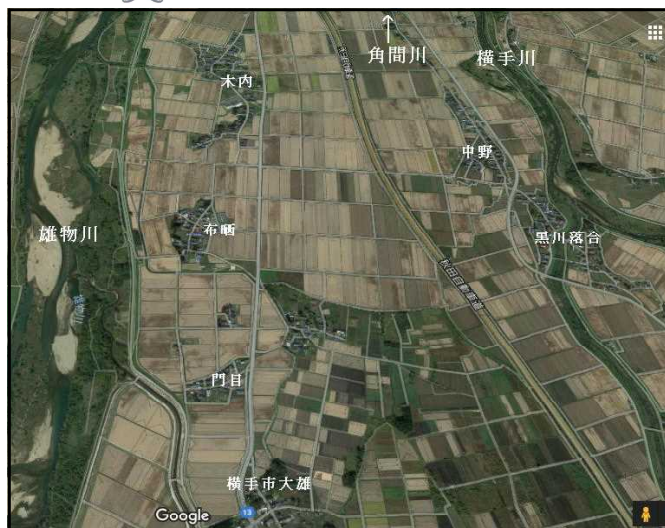
角間川給人の移住は1603年（慶長8年）から3回にわたって行われました。初めに移住した武士として知られているのが元横手城家老（※4）黒沢甚兵衛と八木藤兵衛道広です（以下、八木藤兵衛）。黒沢と八木は角間川に移住する前から佐竹義宣に新しく水田を開発させてもらう許可を願い出ていました。佐竹義宣はその願いを認め新田開発を許可しました。時期ははっきりしませんが開発が始まって、黒沢は久保田（現在の秋田市）に移るように命じられ、残った八木が中心となって、横手から移住した旧小野寺氏の旧家臣たちとともに開発をすすめていったと考えられています。

開発を始めた地域は今の横手市黒川百万刈あたりです。水田に水を引く用水路の工事からはじまり12年にわたるむずかしい工事の末に完成したと言いつたわれています。新田開発のための工事は、今の横手市平鹿町蛭野あたりからはじまり横手市大雄根田川を布晒に通って及びました。用水路の長さは5,167間（1間約1.8mとして9.4km）にもなり、新たに120石（1石=150kg）のお米がとれるようになりました。

※4 家老 藩のなかで藩主を助ける重要な役割を果たす武士。

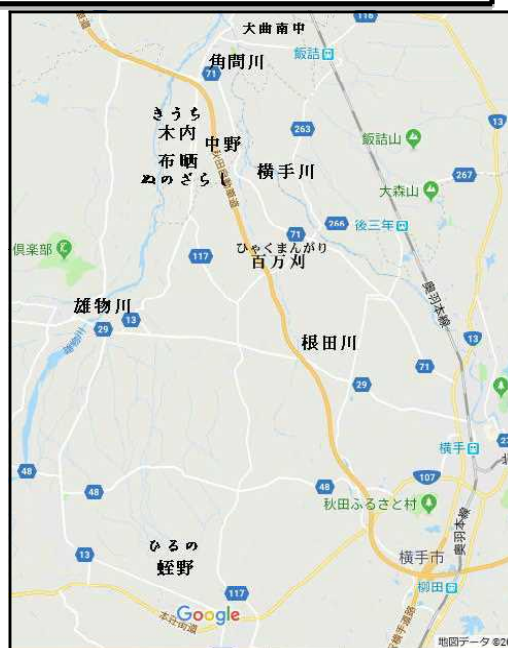


角間川の給人たちが開発で作った用水路のあとをなぞってみましょう。



【図5 現在の木内・布晒周辺に広がる水田】

(Google mapより)



【図6 開発が行われた地域】 (Google mapより)

(3) 新田開発の進展^{しんてん}

新たに開発された水田が広がる場所は角間川開^{ひらき}と呼ばれました。開発のための費用^{ひよう}は横手川でとれる鮭^{さけ}を売ったお金が主なものでした。開発が始まったころは布晒^{ぬのざらし}村に給^{きゆう}人が住んでいましたが、時代が進むと今の角間川町内に移り、下人^{しもいり}(※5)を布晒に住まわせて米作りをさせるようになりました。やがて、村には肝煎り^{ねんぐ}(村長)が置かれるようになって年貢を取るようになっていきました。その後90年ほどにわたって続く開発で木内村(今の木内)、中野村(今の中野)もできて、今のような水田が広がる風景^{ふうけい}が見られるようになりました。

開発した水田は秋田藩の土地となり、開発にあたった給人^{しゅうかく}たちには収穫した米から870石が知行(※6)として与えられるようになりました。

角間川開^{ひらき}は現在の角間川町郊外の布晒、中野、木内に広がる水田として残っています。現在も耕作され私たちの暮らしを支えてくれている目の前に広がる水田は、400年も前に大変な苦勞の末に開発され受け継がれてきた土地なのです。

※5 下人 武士などの家の用事をするための使用人。

※6 知行 主君から与えられた土地で収穫されたお米で与えられる給料。

(当時は、お米が給料として与えられた。武士はお米を米問屋に売ってお金にかえて生活していた。

土地の広さと質によっておおよその収穫量が決められていたが、実際は、天候や災害などによって変化^{いってい}していたので一定していなかった。)



くろう すえ 苦勞の末に開発した水田が知行^{あたえ}として与えられた時、角間川の人たちはどんな気持ちだったであろう。どんなことを考えたであろうか話し合ってみるでござる。

<開田作業中の主なできごと>

- | | |
|--------------|--|
| 1643年(寛永20年) | 角間川給人 ^{おおさわ} が大沢口 ^{よこてしおものがわまちおおさわ} (横手市雄物川町大沢)の番所を守る役目を命ぜられる。 |
| 1664年(寛文4年) | 毎月3と7がつく日に市を開くことが許可 ^{きよか} される。 |
| 1681年(天和元年) | 角間川から、大曲 ^{ぬまだて} 、沼館 ^{あさまい} 、横手、浅舞 ^{ととのえ} へ行く道が整えられ、人や荷物の行き来が多くなる。 |
| 1688年(天和8年) | 商人 ^{しょうにん} 黒丸家が酒造り ^{さけづくり} を始める。 |

(4) 角間川給人を率いた八木藤兵衛

① 大阪出兵の命令

八木藤兵衛は角間川を代表する給人で、角間川給人のリーダーとして先に述べた新田の開発や指導にあたった人物です。

角間川給人はもともと小野寺氏の家来であったため、佐竹氏に仕えるためには実力で認められる必要がありました。認められるきっかけをつくったのが八木藤兵衛でした。

慶長19年(1614年)徳川家康は豊臣秀吉の息子で大阪城を拠点に反抗する豊臣秀頼を攻撃し、豊臣氏を滅ぼす戦いを起こしました。徳川家康は全国の大名に兵やお金、食糧などを出すよう命令しました。佐竹氏はその命令を受け角間川の給人に大阪についてくるよう命令し、その命令を受けて黒沢甚兵衛と八木藤兵衛が一人の家来を連れて大阪に出陣しました。角間川に移住して間もなくのことでしたし、新田開発の工事も進められていた時期だったので、指導する人がいなくなるのは困ったことでしたが、実力を認めてもらうために仕方なく出陣を決めたのでしょう。

*現在は「大阪」と書き表しますが、江戸時代までは「大坂」と書き表されていました。

② 八木藤兵衛の活躍

大阪に出兵した、秋田藩の武士団の大將は家老(※4)梅津半右衛門憲忠でした。

ある日の戦いのことでした。半右衛門が敵の武將と槍で戦って不利な状況のところ藤兵衛がかけつけて、敵の槍をうばって退散させる働きをしました。藤兵衛は半右衛門に名をおぼえてもらい、藤兵衛の働きは秋田藩主佐竹義宣に認められることとなりました。この藤兵衛の活躍によって、角間川給人41人に銀99枚がほうびとして与えられたと伝えられています。

③ 次第に認められていった角間川給人

このように、八木藤兵衛と角間川給人は秋田藩の中で認められるようになり、元和9年(1623年)の参勤交代(※7)で藩主が江戸に上るときには、藤兵衛の他5人がお供としてついて来るよう命じられるまでになったそうです。また、角間川給人が596石の知行を受けたときは、藩主に謁見(※8)することも許され信頼されるようになったのでした。

※7 参勤交代 江戸幕府が大名に1年おきに江戸と領地に住むことを命じたきまり。

領地と江戸を行き来するにはたくさんのお金と人手が必要だった。

※8 謁見

偉い人にお目にかかること。殿様には普通の人は会うことはめったに許されておらず、会えることはたいへん名誉なことだった。

④ 角間川給人の成長

角間川に移り住んだ頃は、昔から佐竹氏の家来ではなかったので、扱いが差別されていましたが、藤兵衛の活躍とともに角間川給人の働きが認められるようになりました。それとともに藩の重要な役割もまかせられるようになり、寛永20年(1643年)には、国境警備の役もまかせられました。今の由利本荘地方と仙北・平鹿の境の警備、大沢口番所勤めを命じられました。他の藩から攻め入れられないようにしたり、あやしい者が出入りしないように守ったりする役でした。

表2 角間川給人の知行高(元和9年)

やがて、慶安2年(1649年)に八木家の主人が替わる時には、藩主に謁見することが許されるようになりました。また、寛文2年(1664年)には梅津氏の部下となりました。さらに延宝3年(1675年)には、藩主から杯を頂戴するなど、扱っても昔から家来であった武士と同様のものとなっていきました。「よそ者」としての扱いが「仲間」としての扱いへと変化していったのです。

藤兵衛の活躍や働きが角間川給人の成長に大きな役割を果たしましたが、給人たちが新田開発に地道に努力したこともその成長を大

氏名	開高	氏名	開高
八木 藤兵衛	58.752	日野 源七	8.519
宮原 理右衛門	16.869	滝沢 弥三郎	7.365
松岡 平右衛門	16.863	嶋森 小兵衛	9.890
八木 与七郎	15.250	大沢 惣左衛門	7.509
湯沢 五兵衛	12.983	運戸 弥九郎	8.962
杉沢 采女	12.067	石山 右馬丞	9.637
大友太郎左衛門	12.528	日野九郎左衛門	7.176
日野 源五郎	17.799	関口 靱負	5.494
大友 吉藏	15.680	運戸 久三郎	8.400
落合四郎左衛門	17.167	鮎川 甚吉	8.025
関口 弥平次	15.511	日野 三藏	9.445
嶋森 与吉	13.999	金子 与兵衛	9.243
鍋倉 久助	11.140	六郷左次右衛門	6.913
嶋森 正五郎	13.540	松岡 伊右衛門	5.819
鮎川 弥助	10.466	松岡 甚平	3.012
中嶋 勘解由	10.954	六郷 与左衛門	1.280
金子 二藏	11.259	東海林 兵吉	1.503
芦田 久藏	14.873	日野 九藏	3.088
松岡 勘十郎	17.072	宮原 三吉	4.054
関口 弥八郎	11.580	大沢 長吉	1.200
芦田 二左衛門	11.917	嶋森 三九郎	1.237
石川 与四郎	15.679	滝沢 五郎作	2.418
新田目藤左衛門	11.166	南部倉 弥七	1.820
石山 清七	10.058	鮎川 弥作	1.657
石川 彦三	13.493	伊藤 助一	3.957
金子 内記	11.902	金子 久右衛門	4.960
佐貫 四郎兵衛	10.732	日野 左平次	7.786
高山 孫左衛門	12.702	八木 善八	17.401
佐貫 九兵衛	4.779		
総開高合	596石5斗5升		

(大曲市史編さん室収集文書による)

きく支えたと言われています。

寛文8年(1668年)には総知行高は933石9斗4升になっていました。7ページの表の元和9年(1623年)の総開高合と比べてみましょう。

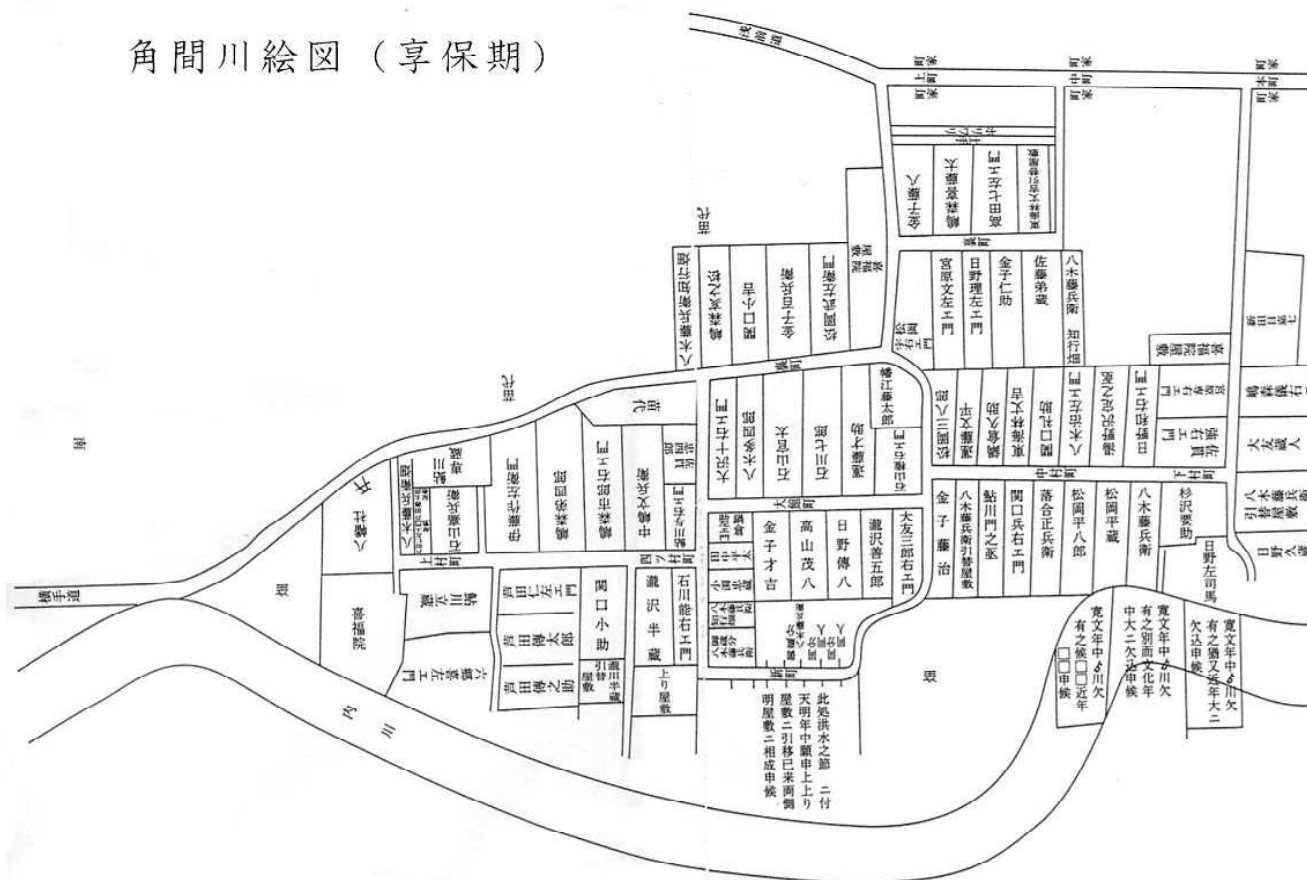


これまでの文章を参考にしながら、角間川給人の動きをまとめてみましょう。

- 年代を目印に読みましょう。
- 年代の動きを短い語でまとめましょう。
- 開石高の数字の増加は何を表しているでしょう。
- 角間川給人の変化をまとめてみましょう。

【参考資料】 <「大曲市史」第1編近世の大曲 第一章近世初期の大曲 第二節角間川給人と初期の新田開発 P12~P19>

角間川絵図(享保期)



<大曲市史 P14・15>

*今も同じ場所に残っているものを手がかりに読んでみましょう。

3 角間川給人の生活

角間川給人が江戸時代にどんな生活をしていたのか見てみましょう。

角間川給人は、武士の身分でしたが、新田開発をしたり耕作をしたりする農業も行う生活をしていました。その他に角間川は川に囲まれた土地でしたから角間川給人は、川での^{りょう}漁も生活の一部として行っていました。

(1) 角間川の^{さけりょう}鮭漁

角間川給人が新田の開発に地道に努力したことは前に述べたとおりです。新田の開発に努力できたのは、角間川給人がまじめだったことが大きな理由ですが、それだけで開発はできません。では、開発には他に何が必要でしょう。開発には道具や材料も必要です。それらを買うたのもとなつたのが鮭漁による^{りえき}利益でした。右の表から分かるように新角間川村は藩の中でも鮭を藩に^{おさ}納める数少ない村の一つでした。魚の中で鮭は利益の大きい商品として大切な^{しゅうにゆうげん}収入源でした。これも川がもたらした恵みでした。

役鮭の藩への年納入量（宝暦年間）

納 入 者	役鮭数(尺)
新角間川村	20
湊獵師共	45
下肴手塩谷七衛門	10
能代獵師	200
神宮寺村	20
大川村	80
大森村寄郷六カ村	30
計	355

「御代官御検地役掟」 県公文書館蔵より抜粋

(2) 不安定だった^{さけりょう}鮭漁

大切な収入源だった鮭漁は^{じゅんちよう}順調に行われたわけではありませんでした。鮭漁には藩の^{きよか}許可が必要でしたが、その許可は時々^{へんこう}変更されるなど不安定でした。

安永3年(1774年)には、角間川給人に許可されていた鮭漁の^{けんり}権利が阿気村(現在の横手市大雄阿気地区)に移されることとなってしまいました。鮭漁ができなくなった角間川給人たちは困りました。そこで、次の年の^{あんえい}安永4年(1775年)、角間川給人をまとめていた梅津^{うめづかめまつ}亀松の父梅津^{こうえもん}小右衛門に鮭漁の許可をもどすようお願い出て許可されました。ところが、その理由は明らかになっていませんが、2年後の安永6年(1777年)には、^{ふたた}再び許可を取り消されています。この決定で角間川給人たちの生活が苦しくなったことは言うまでもありません。

折しもこのころの安永年間は、^{おり}天候が不安定でお米があまり^{てんこう}収穫^{しゅうかく}できない年が続いていました。また、藩の江戸^{やしき}屋敷が火事にあい、^{さいけん}再建にお金がかかると

いう理由で、俸禄^{ほうろく}いわゆる給料が半分しかもらえませんでした。その上、鮭漁^{けんり}の権利を取り上げられたのですから、給人たちの生活は当然苦しくなりました。そこで、それまでは角間川給人の組頭^{くみがしら}（※9）八木五兵衛^{ごへえ}（八木藤兵衛の孫）の使用人の百姓^{しやうにん ひやくしやう}（農民）が藩に願い出て許可を得ていたやり方を変えて、武士身分の、給人たち自身が許可を願い出ました。その結果、安永7年（1778年）には、鮭225尺、銀500目を藩に納めることを条件に許可されることになりました。この許可以後、鮭漁を認める代わりに藩がお金などを補助^{ほじよ}しないことも決められました。このころは藩も他を助けるよゆうがなかったようです。決していい条件ではありませんでしたが、給人たちはその条件をのむことにしました。

※9 組頭 この頃の角間川給人は藩の家老梅津氏の家来となり組（軍団）となっていた。組頭はその軍団のリーダー。

（3）横手給人との鮭争い

角間川給人と同様に横手給人も鮭漁^{しゆうにゆう}の収入を見込んだ生活をしていました。天保11年（1840年）10月、角間川給人が鮭^とを捕ろうとして川に仕かけをしていました。その仕かけの場所に横手給人約80人が来て、網^{あみ}を切って鮭を横取りしようとする事件が起きたのです。

角間川給人はすぐに抗議^{こうぎ}をして止めさせたのですが、いざこざはすぐには収まりませんでした。横手給人が落合上流（今の横手市黒川落合）は横手側の権利^{けんり}の範囲^{はんい}であると主張^{しゆちやう}したからでした。

そこで解決のため角間川給人は藩に訴^{うった}えて解決^{かいけつ}してもらうことにしました。藩から下された決定は次の通りでした。

- | |
|--|
| <p>一 横手から角間川までの川筋のうち、三のうち二を角間川給人^{きゆうにん}の三のうち一を横手給人^かの川狩りを認める。</p> <p>一 横手川^{さかい}に境をしめす杭をたてること</p> |
|--|

決定^{けつてい}は思いに反してそれまで認められていた角間川給人の権利^{けんり}が縮小^{しゆくしやう}されるものでした。藩の決定ですから従わざるを得なかったのですが、角間川給人はどんな思いで決定を受け入れたのでしょうか。

武士でありながら農作業も行い鮭漁^{さけりやう}も行って漁夫^{ぎよふ}としても生活し、これまで見てきたような不安定さや事件を乗り越えながら角間川給人は生活していたのです。鮭漁から角間川給人のきびしかった生活や苦勞がしのべられます。

【参考資料】<「大曲市史」第2巻通史編 第1編近世の大曲 第2章藩政期大曲の社会構造 第1節検地と農民の負担 角間川給人^{きゆうにん}と鮭漁 P48～P51>

II 角間川地主とその役割やくわり

本郷家、北島家、荒川家、最上家という大きな地主が角間川のまちづくりや歴史に大きな役割を果たしました。ここでは角間川地主がどのようなことを行って、角間川のまちづくりや歴史にどのような足跡あしあとを残したか学びましょう。

1 本郷家の興りおこ

(1) 本郷家のはじまり

① 本郷家のもと、庄兵衛しょうべえ

本郷家の初代は庄兵衛しょうべえといい横手前郷村の出身でした。庄兵衛しょうべえは角間川村の能登屋市兵衛のどやいちべえに奉公ほうこう（※1）しました。やがて働きが認められて能登屋のどやから独立どくりつして商売することを許され「能登屋」と名乗って角間川に店をかまえました。正確な時期はわかりませんが、庄兵衛しょうべえは享保きょうほう6年（1721年）まで角間川中町に住んでいたと思われ、享保17年（1732年）の8月14日に亡くなっています。

庄兵衛しょうべえが亡くなった後は、妻が商売を引きついで行ったのですが、子どもがいなかったため、養子ようし（※2）をもらいました。それが二代目の本郷吉右衛門きちえもん正法でした。

※1 奉公 商店などに住みこんで働くこと

※2 養子 子どもとして家族に入った子ども

庄兵衛夫婦には子どもがいなかったので家を継ぐ人として吉右衛門きちえもん正法を養子に迎え家族としました。

② 本郷家二代目 本郷吉右衛門正法きちえもん

二代目吉右衛門正法きちえもん（以後、吉右衛門）は、伊勢国多気郡古江村（いせのくにたきぐんふるえむら=今の三重県多気郡）の出身でした。吉田屋吉郎兵衛きちろうべえの子で、幼い頃は喜兵衛きへえという名でした。時期ははっきりしませんが、出身地から角間川まで来て、40歳のころまで、角間川の最上七兵衛しちべえのもとで奉公していました。

吉右衛門きちえもんは最上屋から独立どくりつする時にいただいた25貫文で、本町の中島屋八郎兵衛はちろうべえの向かいに住む市之助どくりつの家を借り、最上吉右衛門きちえもんと名乗って住んでいました。吉右衛門きちえもんは商売を始める頃の寛保3年（1743年）1月に出身地の伊勢いせ

(三重県)に帰り、3月にまた角間川にもどってきたそうです。そして4月1日からまちの市に出店し、8月1日から市之助の所を借りて出店しました。やがて、延享3年(1746年)2月1日に中町の庄兵衛の所を借りて店を出したそうです。

この中町の庄兵衛の所に移ったことがきっかけで、吉右衛門は養子となつて跡継ぎになるよう庄兵衛が亡くなった後も妻から何度となくお願いされました。そのお願いを断っていた吉右衛門でしたが、庄兵衛の妻が亡くなる間に跡継ぎになることを承知しました。

吉右衛門は庄兵衛の出身が横手前郷村本郷だったので、本郷を名乗るようになったと伝えられています。山本郡五城目村の妻と結婚し、安永6年(1777年)に72歳で亡くなるまで力を合わせて一生懸命働き土蔵を建てるまでになったと伝えられ、本郷家発展の基礎を築いたのでした。三代目が家を継いだときは銀十五貫目が財産として残されていたそうです。

③ 本郷家三代目 本郷吉右衛門正道 ~「当家大忠孝目出度御方也」~

本郷家三代目本郷吉右衛門正道(以下三代目吉右衛門)は、角間川村本町の金沢屋平七の家から出た人物です。若くして本郷家に奉公して二代目に気に入られて、平七から養子にもらい本郷家を継ぐことになったと言われています。

三代目吉右衛門が本郷家の商売を継いでからは、家の間口(玄関の広さ)が3間(約5m50cm)だったのが2倍の6間(約12m)に広がり、二代目の建てた家と蔵(家の道具や財産を保存する倉庫)を建てかえるほど本郷家を発展させました。文化八年(1811年)三代目吉右衛門が亡くなって四代目に継ぐときは田地三百石あまりと銀百三十貫目を残したと伝えられ、本郷家の記録には「当家大忠孝目出度御方也」(※3)と評価されているそうです。

※3「当家大忠孝目出度御方也」

読み方:「とうけ だいちゅうこう めでたき おかたなり」

意味:本郷家に大変よく尽くし、ありがたいお人。

【メモ】 本郷家の二代目、三代目は、もともと本郷家の人ではありませんでした。実の子どもがいなかったこともありますが、本郷家は家の発展のために能力のある人物を選んで家を継いでいったわけです。昔はよくあったことでした。



本郷家三代までの歩みを表にまとめてみると変化がわかりやすくなると思うのでござる。

2 本郷家の商売

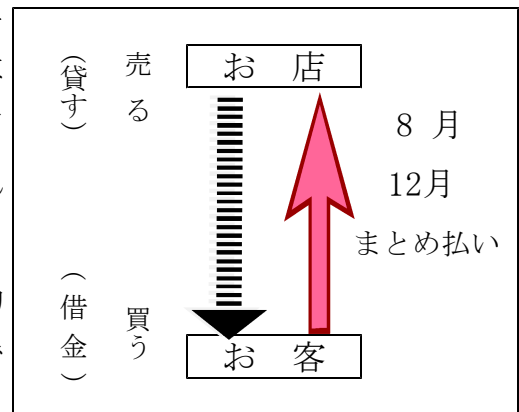
(1) 本郷家の初代と二代目のころ

① 初代 庄兵衛のころの商売

初代 庄兵衛のころの商売については史料が残っていないのではっきりしたことがわかっていませんが、中町に住んで家と畑を求めたという記録があります。商売によってある程度の財産をつくることができたということが言えます。

② 二代目本郷吉右衛門正法のころの商売

江戸時代までの商売は、図1のように商品を買ったときにお金を支払うのではなく、8月のお盆と12月の年末にまとめて支払うのが一般的でした。お店では、だれが何をいくら買ったかを記録していました。つまり、買う人はお店に借金をして買い物をして、後でまとめて支払うという方法でした。



二代目本郷吉右衛門正法のころの商売については宝暦5年（1755年）の史料が残っています。その史料から見ると本郷家は、角間川村の町中の人、角間川給人、角間川村周辺（在郷）の人に商品を売って貸していたことが記録されています。その中で最も貸しているのが角間川村周辺（在郷）の人たちで、貸しているお金の80パーセントをしめています。その史料にはどんな物をどこの人々に売っていたかが分かります。

【表1 本郷家の扱っていた品物とお客の地域】

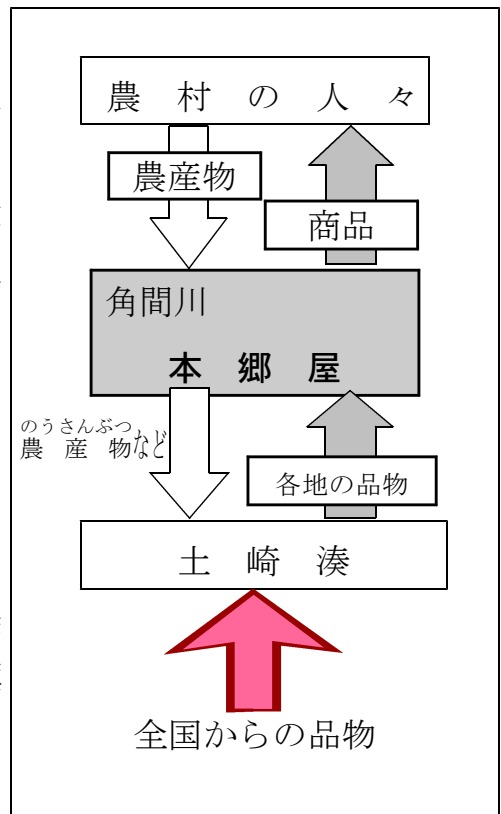
扱っていた品物	木綿・茶・塩・真綿・扇子
お客の地域	川西村々（雄物川の西側の地域） 大曲西根・内小友・宮林新田・松田新田村・板井田村
	川東村々（雄物川の東側の地域） 大曲・小貫高畑・川目・藤木・上深井・六郷村・門野目・黒川 百万刈・田村・八柏村

本郷家が取引していたお客の地域を地図で確認してみましょう。

はじめの頃の本郷家は日用品を扱って、角間川の市に来ることのできる範囲の農村の人を相手に商売をしていました。

明和7年（1770年）の記録からは、米、大豆、小豆などの農産物を農村の人から買い取って木綿・茶・塩・紙・小間物など秋田藩以外で生産された日用品を売っていたことがわかります。

農村から買い取った米、大豆、小豆などの農産物は川舟で土崎湊（今の秋田市土崎）に運ばれ、そこで売られました。そして、農産物を売ったお金で土崎湊に全国各地から運ばれて来る品物を商品として仕入れて、角間川で売っていました。（図2）



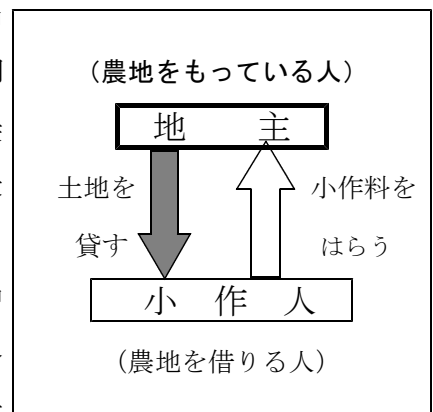
【図2 二代目本郷家の商売】

③ 三代目吉右衛門正道の商売

三代目の頃になると商品を買うに来るお客の農地を買ったり借金の代わりとして得たりするなどして集め、たくさんの土地を持つようになりました。物を売る商店としての顔のほかに、地主としての顔ももつようになってきたのです。

地主は自分のものとなった農地を農民に貸し出し、収穫したお米の一部を貸した代金として納めさせるという商売をしていました。地主から農地を借りている農民を小作人と言ひ、納めるお米を小作料といたしました。（図3）

やがて、本郷家が持っている土地はだんだん増えていき雄物川の東側の下境村、百万刈村（今の横手市）金沢西根村（今の美郷町仙南）にも広がっていきました。本郷家の土地の増え方を次ページ表2で確認してみましょう。



【図3 地主の小作人の関係】

表2 本郷家土地所有の変化

(享和2年～文化13年)

地区・村	享和元年9月	享和2年9月	文化2年1月	文化5年1月	文化12年2月	文化13年5月	備考		
	(1801) (石)	(1802) (石)	(1805) (石)	(1808) (石)	(1815) (石)	(1816) (石) A	村 政 6 年 (1794) (石) B	持高率 A/B (%)	
川西	中田新田村	39,636	39,636	47,648	52,555	56,249	56,309	290,076	19.4
	内小友村	66,619	64,869	69,708	63,151	64,428	63,182	1,788,671	3.5
	宮林新田村	6,435	6,435	6,435	6,439	3,570	3,556	215,950	1.6
	松田新田村	5,392	5,671	8,498	8,498	7,636	7,636	216,382	3.5
	袴形村					2,284	4,275	836,189	0.5
計	(118,102)	(116,631)	(132,289)	(130,643)	(134,167)	(134,969)	(3,347,276)	(4.0)	
川東	黒川村	16,341	16,341	16,341	16,233	19,092	19,092	1,279,342	1.5
	二本柳村	4,733	4,733	6,226	6,410	6,311	6,383	47,017	13.6
	金沢西根村	14,943	14,943	17,660	16,902	21,826	25,874	1,033,967	2.5
	藤木村	14,833	14,833	23,702	15,375	13,192	13,192	1,141,148	1.2
	新角間川	2,465	2,465	5,849	4,692	3,275	9,628	207,120	4.6
	百万刈村		2,722	5,492	17,818	25,714	26,882	308,532	8.7
	田村・阿気村			5,726	5,726	5,624	5,624	948,784	0.2
	八柏村					1,850	1,850	612,601	0.3
	清水町村						431	298,125	0.1
	下八丁村						5,177	382,582	1.4
	下境村			1,400	33,216	63,008	89,613	1,050,368	8.5
	安本村 (清三郎分)	.758	.758	.758	.758	.758	1,861	285,441	0.7
計	(58,073)	(58,795)	(85,154)	(117,130)	(160,650)	(205,607)	(7,595,027)	(2.1)	
合計 (紙戻)	174,175	175,426	217,443	247,773	294,817	340,576	(10,942,303)	(2.6)	
増加		1,251	42,017	30,329	47,044	45,759			
史料	「田地名寄附」 (12月末までの分を含む) (角間川・本郷家文書)	「入作帳」 (角間川・本郷家文書)	「入作物成金引替之帳」 (史料館・本郷家文書)	「入作物成金引替」 (史料館・本郷家文書)	「村々当高入作米人別改扣」 (角間川・本郷家文書)	「川東御田地反扣帳」・ 「川西御田地反扣帳」 (史料館・本郷家文書)	「六郡惣高村別帳」 (県庁文書)		

(注) 高………当高

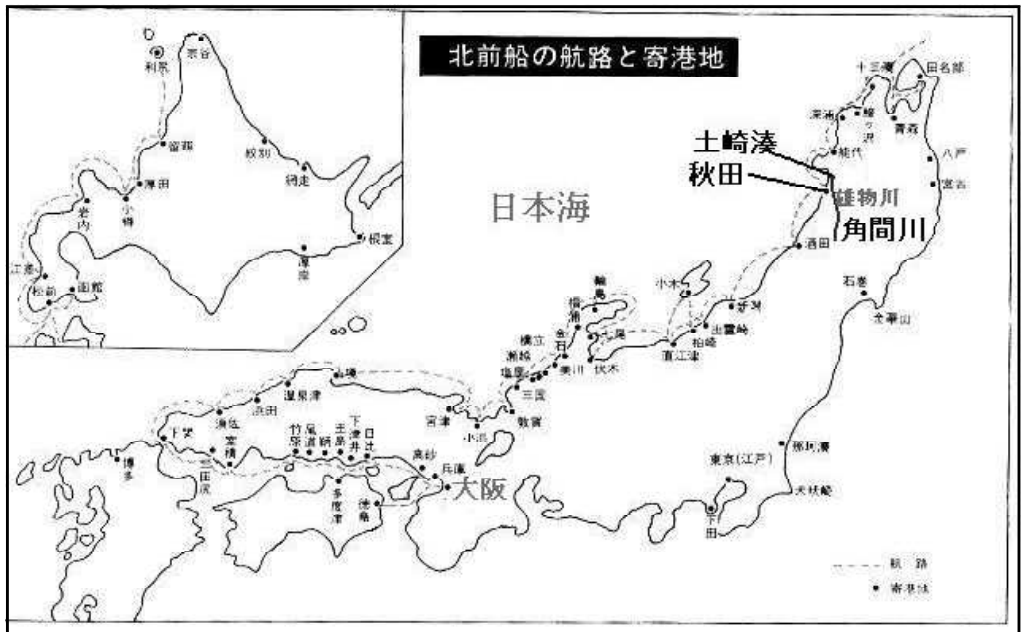
(平田市 太郎「在方商人本郷家における土地集積の進展」による)

(2) 各地とつながる商売

三代目吉右衛門きちえもんになって本郷家が持つ土地が増えるにつれて、米を売り買いすることが本郷家の商売にとって重要になってきました。

この頃になると船での輸送ゆそうが全国でさかんになり航路こうろ(船の通り道)も整えられ、様々な土地と土地が船で結ばれました。

それとともに各地の産物の売り買いが盛んになりました。角間川も図4からわかるように近く



【図4 北前船の航路と泊まった港】

を流れる雄物川を^{つちざきみなと}通って秋田の土崎湊に出れば、北前船（図5）で全国どこにでも物を運んだり運んできたりにできるようになりました。角間川～大阪までの道のりを指でたどってみましょう。

本郷家では、土崎（秋田市）や横手、本^{ほんじょう} 荘^{ひょうご}（由利本荘市）遠くは酒田（山形県）や兵庫（兵庫県）の商人と^{きやうどう} 共^{りえき} 同^{たど}で米を大量に買って大阪に売って利益を上げていました。例えば、文化3年（1806年）には六郷の栗^{くり} 林七兵衛と横手の柏^{かしわ} 谷^や 太郎^{たろう} 右衛門^{えもん}と共同で本荘藩から米



【図5 北前船】

3,575俵を500両で買って大阪やその他の地域の商人に売っています。その時、本郷家は200両を^{ふたん} 負担したのですが、50両は兵庫の大商人北風三左衛門から出してもらっています。また、同じ角間川の北島家や荒川家とも共同で同様の商売をしていたという記録も残っています。

さらに、本郷家は大阪などで各地の塩、紙、ろう、木綿、魚の干物（魚を干したもの）といった産物を仕入れ、角間川でそれらを売って利益を上げこの後の発展へとつながっていきました。この頃の大阪は、日本の経済の中心地でした。

3 秋田角間川の商人

(1) 秋田角間川の商人

江戸時代後期には、本郷家の他にも活躍する商人が角間川にいたことが^{きろく} 記録からわかっています。

文政9年（1826年）の記録によると、土崎湊^{つちざきみなと}の倉庫にあずけていた角間川の商人は次の14人が^{かくにん} 確認されています。

本郷吉右衛門 ^{きちえもん}	荒川勘助 ^{あらかわかんすけ}	最上忠蔵 ^{もがみちゆうぞう}	北島三右衛門 ^{きたじまさんうえもん}	荒川新右衛門 ^{あらかわしんえもん}
平野屋助右衛門 ^{ひらのやすけえもん}	金沢屋平七 ^{かねざわやへいしち}	地主喜右衛門 ^{じぬしきえもん}	地主藤右衛門 ^{じぬしとうえもん}	
甲州屋利右衛門 ^{こうしゅうやえもん}	平野屋長之助 ^{ひらのやちようのすけ}	北島三郎兵衛 ^{きたじまさぶろうべえ}	奈良屋久兵衛 ^{ならやきゆうべえ}	
田牧茂右衛門 ^{たまきしげえもん}				

土崎湊に米を出す商人の6分の1が角間川商人で、扱う米の量の4分の1を占めていたと記録には残っています。

① 北島家

北島家は天和年間（1861年－1865年）に越後国から角間川の地に移って商売を始めました。扇子、くし、^{てならいふで}手習筆、らう竹（図1）、きせる（図1）、大ろうそく、^{せんこう}たばこ入れ、^{せんこう}線香などの各地で生産された生活品と米、大豆、^{まわた}真綿などの近辺で生産された農産物を扱っていました。



【図1 きせる・らう竹】

② 荒川家

^{あらかわしんえもん}荒川新右衛門家は、寛政8年（1796年）荒川家本家（^{かんすけ}荒川勘助家）から500貫目（江戸時代のお金の単位）、^{かんめ}田地6石5斗（約1000kg収穫できる広さ）をもらって独立した家でした。

^{あつかつ}扱った商品は図2を見ると小間物、木綿、古手（中古の服・道具）^{いさば}五十集（魚類・魚の干物）、塩などの各地で生産された生活必需品、^{あづき}近辺で生産された米、大豆、小豆、えごま油、根花を扱い、ほぼ本郷家と同じような商売をしていました。

これらの商売のかたわらで土地の^{しよゆう}所有を進めて本郷家や北島家とならぶ大地主となっていきました。

図2 荒川家正月勘定（寛政10年1789年）

区分	金額(貫文)	内 訳
在 庫 分	159	小間物・くり綿品々売物
	136	木綿
	158	古手
	45	五十集物・塩
	738	米
	242	大小豆
貸 方	80	えごま油・根花
	209	芳々銭貸
	357	商人在々貸方
	121	その他
有金	105	
借方	924	主として商品購入分
計	1,395	(うち10年度益金716貫文)

(注) 貫以下四捨五入

(半田市太郎「秋田藩に
おける在方商業」より)

大曲市史第1編 近世の大曲 P206



図3をもとに荒川家の発展の様子をグラフに表して、調べてみるのでござる。

図3 荒川家の経営状況

内容	年代	①寛政9	②寛政10	③享和3	④文政11
		(1797)	(1798)	(1803)	(1828)
惣売物調・小間物		貫文 458.829	貫文 497.810	貫文 1131.383	貫文 1854.595
掛高調高		382.557			
米		356.980	737.920	2295.532	5199.778
その他穀物		308.117	322.43	131.310	328.892
貸方			687.92	937.792	銀(676貫383匁7分8厘)
その他		93.438	104.625	173.625	
借錢・払方		-937.844	-937.238	-1134.953	682.245
計		662.077	1412.252	3534.689	銀(675貫464匁9分8厘)

(金森正也『秋田藩の政治と社会』より)

大曲市史第1編 近世の大曲 P207

(2) 秋田角間川の商人へ ～大阪でも知られた角間川の商人～

角間川商人は雄物川の舟での輸送を利用して、江戸時代の中期から後期にかけて活躍しました。藩から定期市(※4)を開くことが許可されていた土地を舞台に発展し、「秋田角間川商人」の名は当時の経済の中心地大阪でも知られるほどでした。

角間川商人が扱ったのは特に米が多く、米を舟で土崎湊や秋田の倉に運び、上方(大阪・京都地方)の米商人に売りました。その利益は角間川の市や店で売る各地の産物の買い入れや土地を増やすことなどに使われました。このような商売の仕方は最初から行われていたのではなく、次第に上方商人との結びつきを強めながら発展し、「秋田角間川商人」として大阪でもその名が知られる存在となったのです。

市が開かれる日は、大曲仙北地方の人はもちろん、角間川から遠い土地の人も泊まりがけで来ていたはずでした。生活必需品などの各地の産物を求める人々や商品を仕入れる商売人が行き交いにぎやかだったことでしょう。産物の中には手に入りにくい物や珍しい物もあり、角間川に来ると手に入れたり見たりすることができました。また、商品を運ぶ舟や馬車、そりの往来も多く、今はなくなってしまった仕事をする人たちが見られたことでしょう。当時の人々にとって、角間川はワクワクする場所であったことでしょう。

角間川商人は米によって秋田角間川商人へと成長しました。この成長は角間川給人の働きがその基となっていることを忘れてはなりません。

※4 定期市 江戸時代は店がいつもあるのではなく、4や5などがつく日だけ店が集まって道沿いに市場が出されていた。4のつく日に定期的に市場を開くので、その町の名前が四日町、八日町などと名付けられたところもあった。勝手に定期市を開くことはできず、藩の許可が必要だった。



- ・ 角間川では商業がさかんになり、地主や商人が生まれていったのである。角間川の商業がさかんになっていった原因や角間川の変化について、自分の考えを書いて話し合うでござる。角間川の土地と人のすばらしさがわかってくるであろう。
- ・ 角間川の地主たちが角間川で行った事業を調べてみるでござる。

メモ

一石

江戸時代の武士の給料は米で与えられていました。給料で与えられた米を米屋に売ってお金にかえて生活していました。そのため米はとても大切なものでした。その単位として石が使われました。

日本では、1食に米1合、1日3合がおおむね成人一人の消費量とされているので、1石は成人1人が1年間に消費する量にほぼ等しいと見なされ、単位として使われてきました。

(1000合/1日3合で333日分)。面積を表す日本の単位である反は、米1石の収穫があげられる田の面積として決められたものでした。

【角間川文化のリーダー 黒丸家】

黒丸家は江戸時代から明治時代にかけて角間川の肝煎などを務め、角間川の町づくりや文化に大きな影響を与えてきました。

初代 黒丸惟永 1635年頃 黒丸惟永が越前（福井県）の黒丸郷から羽州仙北（現在の仙北郡）正善寺に仮住まいする。

のちに正善寺の住職にすすめられて角間川に住み、能登屋の商号で商売を始める。

二代 黒丸惟光 1688年 酒造業を本業とする。

四代 黒丸惟常 1771年 肝煎(※5)を32年間務め、藩よりほうびをいただく。

1779年 肝煎を40年間務め藩よりほうびをいただく。

六代 黒丸継宗 1796年 三代にわたって肝煎を務めたことにより藩からほうびをいただく。

七代 黒丸惟孝 1823年 苗字を名乗り刀を持つことを藩から許される。

1822年 旭塚の石碑を建てる

1824年 藩に2000貫を寄付する。

九代 黒丸惟清 1854年 海岸を守るため新屋（現在の秋田市新屋）に移住することとなり角間川より去る。

※5 肝煎 村をまとめる長。今で言う市町村長。

【参考資料】 <「大曲市史」第2巻通史編 第1編近世の大曲 第3章近世大曲の陸運と舟運 第4節角間川の地主と中後期の商品流通 P185～P210>

<資料>

雄物川水運図



角間川周辺の川港



(佐藤清一郎『雄物川往来誌』上)

III 角間川の偉人たち

1 角間川の聖人 落合東堤

落合東堤は武士の身分でしたが、町民や農民にも親しく交わり、商売や結婚相手の相談にも乗ってくれた人としても角間川の人に語り継がれています。



【落合東堤生誕の地】(中上町)

(1) 落合東堤先生

落合東堤は、角間川給人落合忠右衛門の三男として寛延2年(1749年)に生まれました。まじめな性格で読書好きな子どもだったそうです。明和元年(1764年)16歳で中山青莪に朱子学(※1)を学びました。21歳の時は中山青莪と京都に行き学問に励みました。京都にはその後2度ほど学問のために出かけ、角間川までの帰り道、各地を見て回り見聞を広めました。その道のりは次の通りです。

(地図で道のりをたどってみましょう。)

1798年	49歳	角間川→山形→新潟→長野→名古屋→桑名→津→伊勢
		→奈良→京都→大阪→江戸→水戸→日光
1801年	51歳	→白河→仙台→松島→角間川

※1 朱子学 中国でおこった学問で、上下関係の礼儀を大切にするなど正しい人間関係を学ぶ学問で武士の間でさかんだった。

(2) 角間川へ戻って

九代藩主佐竹義和(図1)は、角間川に戻った東堤に藩校明德館の開設にあたって教授となるように頼みました。しかし、東堤はこの頼みを固く断りました。その理由ははっきりしていませんが、兄が亡くなってその子どもを育てるためとか、健康状態がすぐれなかったからなどと伝えられています。教授の頼みは断りましたが、度々秋田の藩校に出かけて藩のえらい人たちを相手に教えたそうです。



【図1】秋田藩九代藩主 佐竹義和

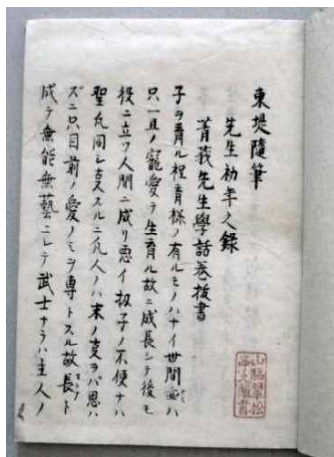
(3) 守拙亭しゆせつてい

東堤は寛政7年(1795年)には角間川に守拙亭という塾を開きました。守拙亭の名前は東堤の師の中山青莪なかやませいががつけました。この頃の角間川はくらしが安定し、商売が盛んになって繁栄し、ぜいたくなくらしぶりも見られていました。守拙亭の名前には、このようなくらしぶりを心配して「先祖たちが新田の開発をした頃を忘れずぜいたくや派手なことをひかえて質素な生活を大切にしよう。」という願いがこめられているのではないかと思われます。この時、東堤は47歳となっていました。

東堤は守拙亭の名前にこめられた思いを武士だけでなく角間川の人々に広めようと、角間川の住民にも学問を教え、道徳を基とした家のあり方や子女(息子とむすめ)のしつけを大事にする教育をしました。

地主の家庭にはそれぞれの家に応じた「家訓」(家として守るべきこと。角間川小の「心得」のようなきまり)を作ってやりました。東堤の教えによって子女のしつけをする習慣が角間川の地域内に広まり、ほかの村とはちがった独特の「むら」ができていきました。

東堤は秋田や角館に出かけて武士にも地域のふつうの人々にも分けへだてなく学問を教えました。藩内にもその教えを広めたので角間川の聖人と言われ、守拙亭には遠くほかの藩からも人が教えを求めて訪れ天保元年(1830年)に閉めるまで教えを受けた人は800人に上ったといひます。



【図2 落合東堤隨筆写本】

年代	主なできごと	年齢
1749年	落合忠右衛門の三男として誕生	
1764年	中山青莪 <small>なかやませいが</small> に学び始める	16歳
1769年	京都で行き学問に励む	21歳
1786年	東堤上書を藩に提出	37歳
1791年	平沢久敬に医術を学ぶ	42歳
1795年	角間川に戻り、守拙亭を開く	46歳
1798年	長旅に出る	49歳
1810年	藩主佐竹義和から金三百疋をほうびにいただく	61歳
1819年	藩主佐竹義和から金百疋、真綿二両をほうびにいただく	70歳
1830年	守拙亭を閉める	81歳
1834年	藩主佐竹義厚 <small>えつけん</small> に謁見を許され銀十枚、真綿十両をいただく	85歳
1841年	93年の生涯を閉じる	93歳

【図3 落合東堤の年表】

(4) 角間川の聖人東堤先生

東堤先生は儒教という中国からきた学問を教える学者でした。学者というと近寄りたがたいように思われますが、そうではありませんでした。町民や農民に対しても気軽に接し、商売や結婚の相談に乗ってくれることもあったそうです。とても気さくな人であったそうです。当時、角間川にいい医者がないことを残念に思い、42歳になって角館の平沢久敬に医術を学びました。後には、耳の薬「文六膏」を作るなど病気の治療やきずの手当をして多くの人に感謝されたそうです。

医者になったことからわかるように、世のため人のために役立つとする気持ちが高く、その気持ちを実際の行動に移した人でした。先生のそのような性格を表すこととして、「東堤上書」があげられます。

天明3年(1783年)を中心に東北地方は夏の天候がすぐれず米が十分に収穫できませんでした。また、ほとんどの米を大坂に送ってお金にかえていたため、困ったときのための米の備えがありませんでした。そのため、たくさんの人たちが餓死しました。(図4)



角間川とその周辺でも同じようなことが【図4 天明の飢饉の様子】起こりました。東堤はそのような状況を解決しようと、若くして藩主になった佐竹義和に自分の考えを書いた意見書を差し出し、人々を救おうとしました。さらに角間川の地主たちに困っている人々や農民を助けることを頼みました。地主たちは東堤の頼みに従って農民を助ける方法を取りました。この他に米の代わりとなる食べ物について農民に教えたり、寒さに強い米を作るために品種改良を行ったりしました。

東堤先生は、たえず世のため人のためのことを考え、学問を教えるだけでなく、人を救うために学問を生かそうとする行動の人でもあったのです。



落合東堤先生は角間川の人々や角間川にどんなことを残してくれたのか話し合ってみるでござる。そして、落合先生に手紙を書いて、浄蓮寺にある落合先生のお墓の前で読んでみてはいかがであらう。

2 角間川郷校と関口兼三

寛政元年（1789年）に秋田藩の藩校が、久保田（秋田市）に開かれました。その5年後に角館・横手・院内（今の湯沢市院内）・檜山（今の能代市檜山）・十二所・大館に分校が開かれました。そして、文久元年（1861年）には角間川郷校（武士の子のための学校）が開かれました。郷校を開くために資金を出すなど大きな役割を果たしたのが落合東堤に教えを受けた関口兼三でした。

（1） 秋田と江戸で学ぶ

兼三は文化8年（1811年）に角間川給人関口喜兵衛の次男として生まれ、天保6年（1835年）藩校明德館に学びました。その後、天保11年（1840年）に江戸に出て安積良齋のもとで一先懸命に学び、塾頭になりました。師匠の安積良齋が将軍徳川家定に会うことを許されたほどの人で、江戸幕府の学問所の教授だったことから考えて、関口兼三も相当なレベルの学問をもつ人に成長していただろうと思われま

年代	主なできごと	年齢
1811年	関口喜兵衛の次男として誕生	
1835年	秋田藩の藩校明德館で学ぶ	24歳
1840年	江戸に出て安積良齋の塾で学ぶ	29歳
1854年	秋田藩の藩校明德館の教授として迎えらる	43歳
1861年	角間川に戻る	50歳
1862年	角間川郷校が金四郎火事で焼失し、再建される 藩の命令で領外に追放される	51歳

【図5 関口兼三の年表】

（2） 秋田へ、そして郷校開校

安政元年（1854年）43歳の時、秋田藩の家老で角間川給人のリーダーでもあった梅津氏が兼三の学名が高いことを知り、秋田藩の藩校明德館に教授として迎えました。この時、兼三は梅津氏の誘いを何度もことわったのですが、最後は梅津氏の熱意に負けたようです。

藩校明德館には43歳から50歳までの7年間勤め、その後角間川にもどり郷校を開くことに力をつくしました。開校にあたって次のような苦勞をしたことが記録

のこ
に残っています。

「はじめは武士の子どもたちのための学問所、郷校を建てようとしたが、適当な大工がいなくて困っていた。たまたま大沢御番所からの帰り、親しくしていた薄井村(今の横手市雄物川町)の村長の小野孫左衛門に相談したところ、その場にいた小野寺という人が『やりましょう。』ということになって、関口氏はよろこんでお願いすることにした。そこで、小野寺という人が工事の監督をして板井田村(今の横手市大森町)の大工高橋七五郎を工事長として、自宅のある角間川中村町に建てた。」

(島森道義「郷土史談」を参考)

郷校の教授には八木藤兵衛(※2)、教授見習いに高山東、金子主礼がつきました。学習の内容は、正確なところはわかりませんが中国の学問を基にした朱子学の他にヨーロッパから伝わった学問も取り入れていたという言い伝えがあります。

※2 昔はその家を継ぐ人が代々同じ名前を継ぐことが普通でした。

この八木藤兵衛は何代目か後の八木藤兵衛です。

(3) 郷校のその後と関口兼三

兼三が苦心して建てた郷校ですが、金四郎火事と呼ばれた火事で火が燃え移り焼けてしまいました。その後、建て直されましたが1868年に角間川を襲った戊辰戦争で再び焼け落ちてしまい、それ以後は喜福院で授業が行われたそうです。

郷校を開くことに大きな力を尽くした兼三でしたが、文久2年(1862年)に藩の命令で秋田藩の外に追放されてしまいました。その理由ははっきりしていませんし、その後の消息もわからなくなってしまいました。火事にあたり追放されたりした兼三はどこでどのような思いで一生を終えたのでしょうか。



みんなで次のことを話し合ってみましょう。

- ・もし関口兼三がいなかったら。
- ・藩から追放された関口兼三はどのようなことを思って一生を終えたのでしょうか。

この他に問いをつくって話し合ってみましょう。

【参考資料】 <「大曲市史」第2巻通史編 第1編近世の大曲 第4章近世大曲の文化と生活

第1節近世大曲の教育 P211~P222>

IV 角間川盆踊りの歴史

現在の角間川盆踊りが創られたのは昭和の初めの頃です。いきなり誕生したわけではなく、江戸時代からのできごとが土台となって角間川盆踊りが創られたのです。角間川盆踊りにも角間川の位置の恵みと先人たちの営みが生きていて感じながら角間川盆踊りの歴史の道をたどっていきましょう。



【図1 現在の角間川盆踊り】

1 ソソリコ（盆踊り）から仁輪伽へ

(1) 江戸時代の盆踊り

江戸時代には、能登半島（石川県）辺りから土崎を経て角間川に移り住んだ人たちが、盆踊りという文化を角間川に伝えたと言われています。角間川は舟による運送で発展した町であるため、上方文化（大坂・京都地方の文化）や江戸文化が入りやすい環境でした。その頃の盆踊りについては資料が残っておらずどのようなものであったかはわかりませんが、おそらく今の盆踊りのように角間川の人たちが一同に集まって踊るのではなく、集落ごとに行われたのではないかと思われま

(2) 明治の頃からの盆踊り

明治初期には、「稲刈り奉納踊り」が、諏訪神社の境内に周辺の集落から踊り手が集まって踊られていました。この踊りは別名を「墓踊り」と言いました。曲調は「サイサイ囃子」(※1)のみで、「ソソリコ」と呼んでいたようです。

「ソソリコ」は秋田音頭をまねた踊りで、年に1回の自由な踊りなので、仮装する者や酒に酔っている者など様々でし



【図2 諏訪神社】

た。子どもたちは、その踊りを見てこわくて逃げ出す者や「おもしろい。」と踊りに参加する者など様々だったそうです。楽しみの少ない時代だったので1年に

一回のお祭りをふだんの生活とはちがったふんいきを思い切り楽しんだのでしょ
う。

明治の中頃、明治20年から明治37年にかけては、お盆の8月14日から8月20日
の間、その場で振り付けを考えて踊る「仁輪伽」と呼ばれる即興踊りが行なわ
れていました。町内単位で組を作り、太鼓や笛、三味線のお囃子をつけて町内
を練り歩くように踊って回るスタイルであったようです。地主の家の門前ではか
がり火を回って踊りました。

仁輪伽踊りでは、集落に婿に入った者が顔に炭をつけて袴姿で「仁輪伽」
という札をもって歩く習わしがありました。仁輪伽は角間川の町中だけでなく
周辺の集落でも評判がよく人気があったそうです。その人気におされて「ソソ
リコ」は踊られなくなりましたが、この仁輪伽も明治37年以降は踊られていない
らしく、その後は、昭和初期まで角間川では盆踊りが途絶えていました。

※1サイサイ囃子 現在の角間川盆踊りでもサイサイ囃子が演奏されている。



【図 3

平野長一郎著 ふるさと絵ばなし 仙北編 P 81より

仁輪伽踊

りの様子】 (左上の人が着ているのが袴)

2 藤田庄八のがんばりと角間川盆踊りの誕生

たんじょう

(1) 角間川盆踊りの^{がんそ}元祖 藤田^{しょうはち}庄八

現在の角間川盆踊りの原型^{げんけい}になった踊りは、昭和5年、藤田庄八によりかたちづくられました。昭和6年（1931年）には、角間川全町青年団（団長は最上義広氏）主催による第1回全町盆踊り大会が町の通り^{かいさい}で開催されました。

ここで藤田庄八について調べてみましょう。藤田庄八は明治4年、角間川東本町の生まれで、芝居^{しばい}踊り六法と秋田音頭を参考に角間川盆踊りを創作^{そうさく}したといわれています。少年時代は庄屋^{しょうや}（※2）の家の見習いとして秋田に出ました。しかし、芸事^{げいごと}に夢中^{むちゅう}になり六郷の市川団五郎に弟子入りして芸事を練習し、その後役者として明治28年頃から芝居一座^{しばい いちざ}とともに岩手、青森、山形の各地を回って歩きました。

明治30年、秋田に身分の高い方がやってきた時に、庄八は得意とする「秋田音頭」を踊るチャンスを得ました。この時の踊りがすばらしいと県知事から絶賛^{ぜっさん}されました。このことがきっかけとなり、庄八は翌年、東京の博覧会^{はくらんかい}で行われた九段坂の舞台上、秋田県代表として踊り大いに評判^{ひょうばん}を高めました。

その後は藤木八圭の富田丹治が経営する船小屋で仲間を集めて「庄八芝居」^{ひろう}を披露しました。たいそう評判がよく、その評判は周辺の町や村にも聞こえ「庄八芝居」は様々な所に招かれました。

庄八は何をやっても上手で「鹿島さんづくり」「消防出初め式のはしご乗り」は右に出る者がいないという腕を持っていました。そのような庄八ですから、盆踊りをきちんとした踊りにしたいという思いがあったようです。

その頃の角間川周辺の盆踊りには「ふざけておどっても盆踊りである。」「盆に楽しく踊ればいいんだ。」という考えがありました。仁輪伽踊りの考え方が



【図4 盆踊り練習前の様子（中央が庄八）】

残っていたのでしょう。庄八はそのような考え方を、「一番下等^{だいきら}で大嫌いな考えだ。低俗^{ていぞく}な踊りだ。」と日頃よく言っていたそうです。ですから、あまり盆踊りには関わっていなかったようです。

やがて、何がきっかけかははっきりしないのですが一転して盆踊りを創作^{そうさく}することを決意しました。おそらく、周辺の大きな町で行われている行事^{おく}に後れ

を取りたくないという気持ちになったのではないかと思います。

庄八は芝居踊り^{しばい}と六法と秋田音頭より技法を取り入れて盆踊りの創作に取り組み、4ヵ月かかって完成させたそうです。庄八は芸に身を捧げる^{ささ}こと95年、昭和42年（1967年）1月10日に亡くなりました。

※2 庄屋 町内や集落のまとめ役

(2) 角間川盆踊りの誕生^{たんじょう}

昭和5年6月24日庄八が北星会（※3）の堀江長助を呼び、「盆踊りが完成したので北星会に話してくれ。」と頼んだ^{たの}ので、北星会（当時会員38名）はさっそく会議を開きました。

堀江が「庄八さんが盆踊りを教えるので、練習^{ていあん}しませんか。」と提案したところ、一人、二人と反対意見が出て提案は賛成^{さんせい}されませんでした。当時の角間川は鉄道に輸送^{ゆそう}の主役をゆずってにぎわいが下火となり、町中で踊ることなど考えられなかったというのが一つの理由です。もう一つの理由は、今とは異なる^{こと}その頃のお盆（8月13日～16日）の事情^{じじょう}があります。その頃は買い物はすべて後払い^{あとばら}で、まとめて年2回（お盆前とお正月前）に支払^{しはら}うのが習わし^{なら}でした。町の人たちはお盆の前に借りていたお金を払うためお金の計算をしたり集めたりと頭を悩ます^{なや}忙しい時期^{いそが}だったのです。提案が受け入れられなかったのも仕方^{しかた}のないことだったのかもしれない。

ところが、議長^{ぎちょう}の柿崎が静かに「私は踊りが好きです。個人で庄八さんに習いに行きますので、だれか他に習いたい人がいたらいっしょに行きませんか。」と言い出しました。すると、金^{こん}、中川、元吉、伊達^{もとよし だて}がそれに続き練習することになったそうです。

このことを堀江が庄八に報告すると、その夜から番小屋^{ばんごや}（今の駐在所前のガソリンスタンドの場所にあった夜回りのための小屋）で練習することになったのでした。昭和5年（1930年）7月2日のことでした。

堀江長助の日記にその頃のこと^{ほり え ちようすけ}が記録^{きろく}されています。

練習は連日続き、日増しに見る人



が増え、一人また一人と踊りに加

【図5 盆踊り練習の様子】

わるようになっていった。始めの頃の踊りは相当 ^{むずか} 難しく練習に参加した人は主に男性(北星会員)で数人女性がいた。

堀江長助夫人は初日から参加し、四日目頃から小国さん、松田^{さん}産婆さん川向かいの美咲亭^{みさきてい}の女将^{おかみ}さんが練習に参加した。七日目頃から堀江夫人は近所の女の人たちを^{さそ}誘い九郎兵衛^{くろべえ}稲荷神社の前で高橋ハルノさん西タカさん、小松さんがこっそり練習を始めた。

練習は夜中の1時まで行われ、柿崎の^{ふる}がんばりが全員を奮い立たせ20日間ほどつづいた。熱心に参加した人は柿崎^{かきざき}賢吉、北星会員、大保上野三之助^{おおほうえのさんのすけ}、伊藤^{ためい}為一洋服店、新町久保江兄弟^{しやうぞう}、西庄^{せい}蔵、西民三、久米、小野寺、黒丸であった。この人たちは翌年から六郷、横手、大森などに北星会員と共に庄八氏に連れられて踊りに行った。お囃子は横笛と大小太鼓で演奏され、横手の送り盆で演奏される「横手サイサイ」に似ていました。

※3 北星会 歯科医の高橋教三が大正15年に結成した会。町の活性化に力を尽くした。

【主な事業】

- ・綱引き大会 ^{とうろう} ・灯籠流し ^{かいさい} ・角間川盆踊り開催 ^{じよせつ} ・野球試合参加
- ・出征^{しゅっせい}兵士の^{かんそう}歓送 ^{すいなん} ・水難家庭への救済 ^{じよせつ} ・雪下ろし・諏訪神社除雪
- ・墓地^{ぼち}の^{せいそう}清掃 など

【主に活躍した人】

高橋九郎兵エ(福祉担当) 佐々木市郎兵エ(灯籠流し他)
寺嶋順吉・坂田耕作(全般) 竹内敬・堀江三郎(野球担当)
柿崎賢吉(盆踊り) 堀江長助(会計) 保江寅松(名付け親)

(3) 第1回角間川盆踊り大会の開催へ

このように昭和の初めに庄八と北星会の努力によって角間川盆踊りは誕生したのですが、この当時は日本全体が戦争に向かって進んでいた暗い時代でしたので、どこの青年団(若い人が集まった会)も踊りを踊るなど考えもしないものでした。

しかし、角間川全町の青年団が「角間川盆踊り大会」を開きたいという方向に話が盛り上がっていきました。そこで、練習会を小学校の体育館で開いたところ参加者が多く入りきらないことになり、各町内ごとに3日ずつ交代で練習を行うこととしました。この盛り上がりの評判となって、角間川ととなりあう大久保、宮林、黒川、田根森などの若者が自分たちの仕事小屋で練習する姿が見られたそうです。当時の人たちが戦争に向かいながらも踊りを踊って楽しみたいという気

持ちを心の中に持っていたということでしょう。

このように全町的に盛り上がる中、第1回角間川盆踊り大会が昭和6年に開催されました。北星会（40名）は庄八の指導で編み笠をかぶり、浅黄色の袴纏、白足袋姿で踊りました。この他に太陽会ははじめ各集落の団体が率先して参加しました。佐々木市郎兵エが大会の一切を取り仕切ったと堀江長助の日記には書かれています。

（4） 角間川盆踊りの広がり

その後、戦争が広がり太平洋戦争が始まると、男性が少なくなり女性の踊り手が多くなったことで、元は男踊りの仕上がりであった角間川盆踊りはむずかしい部分が省略されて、現在見られるような踊りになったと言われています。

女性踊りの時代に入ると、むずかしい部分はほとんど省略されてしまったようで、庄八は「盆踊りは多くの人たちが踊るもので団体踊りである。だから、このように省略されるのは仕方がない。」と思っていたそうです。反面、男性たちが中心となるお囃子には細かく多くの注文をつけながら晩年を迎えたそうです。



【図6 現在の盆踊り】

昭和42年（1967年）6月21日には角間川盆踊りは第1号の大曲市民俗無形文化財に指定を受け、これを記念して佐々木市郎兵エの提案で浴衣を作りました。藤田庄八が亡くなって5カ月が過ぎていました。

時代が進み、数日間踊られていたのが8月16日のみとなり会場を旧地主三家前の本通りに移りました。踊り手や囃子方の減少があり、小中学生も参加し今後への継承が図られ今日に至っています。



- 角間川盆踊りの移りかわりを年表にまとめてみましょう。
- 年表を見て「どんなことがわかりますか。」「どんなことを思いますか。」自分の考えを書いて、話し合ってみましょう。
- 藤田庄八と仲間のがんばりを角間川町の人に伝えてみましょう。
- 現在の角間川盆踊りにはどのような問題があるのでしょうか。その問題に対してどんな考えをもちますか。



【図7 角間川地主御三家の前での盆踊り】

(図6：角間川地域活性化協議会ホームページより 図7：角間川盆踊り 旧公式ホームページより)

【参考資料】 <「角間川の盆踊りの誕生と普及～堀江長助氏の手記より～」>

図3～図5は参考資料より

角間川の歴史年表 角間川地域活性化協議会ホームページより

【 I 角間川創成期 ～角間川の開発が始まった頃～】

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1603年 (慶長8年)	<ul style="list-style-type: none"> 72人の武士が^{かいたく}開拓を始める。 (小野寺氏 旧家臣団の一部) 	<ul style="list-style-type: none"> 徳川家康が^{え どもくふ}江戸幕府を開く
1604年 (慶長9年)	<ul style="list-style-type: none"> 喜福院^{きふくいん}建立。開基^{かいき}空在上人 (1602建立説あり) 八幡^{はちまん}申社建つ。 武士達の守り神として横手城から移す。 	
1613年 (慶長18年)	<ul style="list-style-type: none"> 旭^{あきひめ}姫^{みこ}という巫女が^{いっしょ}いっしょについてくる。 浄蓮^{じょうれんじ}寺^{かいき}建立。開基 三誉上人。 	
1614年 (慶長19年)	<ul style="list-style-type: none"> 開高120石。根田川^{こんたがわ}、蛭野^{ひるのげき}堰の両堰完成する。 大坂冬の陣に黒沢甚兵衛と八木藤兵衛が出陣。 (千本槍=功名槍) 角間川^{じやのさき}給人、蛇^{へび}の崎 (現在の横手市蛇の崎) より土 崎口までの漁場の特権を藩公より許可される。 	
1615年		<ul style="list-style-type: none"> 豊臣氏^{とよとみし}が^{ほろ}滅ぶ。 武家^{ぶけしよ}諸法度^{しよほつと}が定められる。 参勤交代^{さんきんこうたい}が定められる。
1635年 (寛永12年)	<ul style="list-style-type: none"> 黒丸家^{のえゆ}能州高松より移住、商売を始める。 	
1640年 (寛永17年)	<ul style="list-style-type: none"> 覚善^{かくぜん}寺^{にたいしよ}建立。開基日恵上人。 	
1641年		<ul style="list-style-type: none"> 長崎の出島にオランダ^{さこく}商館を移し鎖国の体制が固まる
1643年 (寛永20年)	<ul style="list-style-type: none"> 角間川給人、大沢^{せきしよ}口関所勤めを命ぜられる。 	
1648年 (慶安元年)	<ul style="list-style-type: none"> 諏訪^{すわ}申社建つ。 	
1658年 (万治元年)	<ul style="list-style-type: none"> 梅津^{へんせい}氏組下に編成される。 	
1664年 (寛文4年)	<ul style="list-style-type: none"> 市日^{きよか}が許可される。(月6回、3と7の日) 	
1666年 (寛文6年)	<ul style="list-style-type: none"> 角間川給人、300石1騎の角間川^{ちゆうゆづん}駐留軍となる。 	
1681年 (天和元年)	<ul style="list-style-type: none"> 北島^{えちご}家越後高田より移住。(油屋) 	
1688年 (元禄元年)	<ul style="list-style-type: none"> 黒丸家二代目酒造業を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> 元禄^{げんろく}文化が上方(関西地方)を中心に栄える。
1694年 (元禄7年)	<ul style="list-style-type: none"> 開拓^{かいたく}がひとまず終わる。大地震あり。 浄蓮寺^{じょうれんじ}に北島三左衛門^{まんだら}が曼荼羅寄付。 (鎌倉時代の作) 	

	この頃、灌漑用水路の蛭野堰 <small>ひるのげき</small> 、深堀堰（ふか つぼり・ふかんぼり）できる	
--	---	--

【安定期 開発がほぼ終わった頃】

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1700年（元禄13年）	・黒丸家の先代についてきた市兵衛を能登屋市兵衛として分家させる。	
1704年（元禄17年）	・大干ぼつ。	
1711年（正徳元年）	・長応寺建つ。開基大森道彦。	
1714年（正徳4年）	・田村（横手市大雄）の泥炭 <small>でいたん</small> を他郷の者が掘ることを禁じる。	・享保 <small>きょうほう</small> の改革 <small>かいかく</small> が行われる。
1721年（享保6年）	・横手市本郷生まれの本郷家初代庄兵衛が角間川に屋敷を得る。	
1726年（享保11年）	・愛宕 <small>あたご</small> 神社の始まり。	
1728年（享保13年）	・荒川家二代目勘助生まれる。	
1730年（享保15年）	・梅津小右衛門組下の給人73軒、給人以外の戸数191軒。	
1740年（元文5年）	・五郎兵衛、肝煎となり以後40年間（1779年まで）務め上げる。	
1743年（寛保3年）	・本郷家二代目吉右衛門（伊勢国生まれ）が庄兵衛家を借りて最上屋の屋号で出店する。後に屋号を本郷とする。	・田沼意次 <small>たぬおきつぐ</small> の政治が行われ
1749年（寛延2年）	・落合文六（東堤）生まれる。（1月1日生まれ）	る江戸を中心 <small>かせい</small> に化政文化が
1756年（宝暦6年）	・肝煎 <small>きもいり</small> の五郎兵衛、村に多くの餓死者がでた折に、米や銀二貫二百文を出して村人を救済する。	発展する。 ・諸藩 <small>しよはん</small> の財政 <small>ざいせい</small> が苦しくなり
1774年（安永3年）	・大火で浄蓮寺・長応寺焼ける。	始める。
1778年（安永7年）	・角間川給人 <small>ほかく きよか</small> にサケ捕獲の許可が出る。	・藩校や寺子屋が各地で開か
1779年（安永8年）	・五郎兵衛 <small>きもいり</small> 、肝煎勤続40年の功績 <small>こうせき</small> で、藩より褒章 <small>ほうしょう</small> を受ける。（調銭五貫文）	れるようになる。

※ 肝煎 村のリーダー、村長

【河港発展期 河港が発展した頃】

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1782年 (天明2年)	<ul style="list-style-type: none"> ・^{きもいり}肝煎中嶋屋堀江八郎右衛門が自然港を改築 	<ul style="list-style-type: none"> ・^{かんせい かいかく}寛政の改革が行われる。
1783年 (天明3年)	<ul style="list-style-type: none"> ・^{だいきようさく}大凶作。 	
1786年 (天明6年)	<ul style="list-style-type: none"> ・落合東堤が藩への献策『東堤上書』提出。 	
1787年		
1793年 (寛政4年)	<ul style="list-style-type: none"> ・角間川^{けいご}警護の大沢口関所を番所と改称する。 	
1795年 (寛政6年)	<ul style="list-style-type: none"> ・この頃から^{しゆせつてい}守拙亭 (落合東堤私塾) を開く。 	
1798年 (寛政10年)	<ul style="list-style-type: none"> ・落合東堤、長旅こ出る (5ヶ月間) 角間川→山形 →新潟→長野→名古屋→桑名→津→伊勢 →奈良→京都→大阪→江戸→水戸→日光 →白河→仙台→松島→角間川。 	
1801年 (享和元年)	<ul style="list-style-type: none"> ・湯沢屋、港の^{にあげば}荷揚場整備を藩の補助を受けて行 	
1802年 (享和2年)	<ul style="list-style-type: none"> う。鳥海山噴火。 	
1804年 (文化元年)		
1807年 (文化4年)	<ul style="list-style-type: none"> ・荒川家二代目勘助没。 	
1809年 (文化6年)	<ul style="list-style-type: none"> ・荒川勘助三回忌法要をもって七面山大明神^{かんじょう}勧請 のため石碑を建立。 ・関口兼三生まれる。 	
1811年 (文化8年)	<ul style="list-style-type: none"> この頃、黒丸五郎兵衛が肝煎となる。 この頃、^{おおともぎけい}大友玄圭がこの研究をする。 ・湯沢屋六右衛門、角間川港の整備をする。 	
1815年 (文化12年)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒丸家七代目惟孝 (俳人で六川と号す) ^{あさひづか}旭塚 	
1822年 (文政5年)	<ul style="list-style-type: none"> に^{せきひんりゆう くよう}石碑建立し供養する。 ・^{だいききん}大飢饉 	
1833年 (天保3年)	<ul style="list-style-type: none"> ・新目五郎助が^{かんおんこう}感恩講をつくる。 	
1835年 (天保6年)	<ul style="list-style-type: none"> ・町の肝煎に提出された^{さいにゆざいげんきろく}歳入財原記録によると、 	

1836年 (天保7年)	町内に地主として名を連ねる者25名あり。 さいりよく ひつてき 財力合計は酒田の本間家に匹敵するほど。	
1837年 (天保8年) 1841年 (天保12年)	・落合文六 (東堤) 没。 (93歳、八幡神社祭日)	おしおへいはちろう ・大塩平八郎の乱 みずのただくに てんぼう かいかく ・水野忠邦が天保の改革を 行う。

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1849年 (嘉永2年)	・浄蓮寺、長心寺再建復元する。 さいけん ※男鹿門前にも黒船来航。	さつま ひぜん ・薩摩藩 (鹿児島) 肥前藩 (佐賀・長崎) 長州藩 (山口) などの藩が力をもち始める。
1853年 (嘉永6年)		うらが かながわ ・浦賀沖 (神奈川県) にペリー一の黒船来航。
1854年 (安政元年)	・内町に郷校建つ。(島森道義遺稿より) ごえう (1860年文久1年に私塾青松館設置という説もあり)	
1859年 (安政6年)	・黒丸惟清 (九代目) 海岸防備のため新屋へ移住を命ぜられる。 ぼうび	
1861年 (文久2年)	※男鹿門前にロシア軍船寄港。	
1862年 (文久3年)	・本町金四郎火事により郷校 (青松館) 被災全焼。 せきぐちけんぞう りようかいついほう ・関口兼三、領外追放。(理由・後年ともに不明) →明治4年土崎にて没。正善寺に埋葬。享年61歳。 臨終の言「有志無時鳥呼命哉」(高橋尚 (編) 1993、角間川尋常高等小学校著『郷土史年表』 郷校 (青松館) 再建。	
	・本郷、北島、荒川、最上など地主が藩に多額の けんきん 献金を行う。 たがく	

【河港・地主最盛期 河港・地主が最も栄えた頃 ～明治時代～】

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1867年 (慶応3年)		たいせいほうかん ・大政奉還
1868年 (慶応4年)	ぼしん いしん ・戊辰戦争・明治維新 8月13日角間川の戦い。 この頃、河港でこぎわう。	
1869年 (明治2年)	こうがく かんしや かいぞう ・青松館を講学館と改称。本町官舎を改造移築。	
1870年 (明治3年)	・松岡白石 (南画家) 生まれる。	
1871年 (明治4年)		はいはん ・廃藩が行われる。
1872年 (明治5年)	しよにもつ うんゆ にんか ・県から雄物川諸荷物相対運輸場として認可される。 ・外町有志により共同の講学所青松館が新築される。	がくせい ・学制が行われる。
1872年～1873年頃		ちようべいけい ち そかいせい ・徴兵令、地租改正が行
1874年 (明治7年)	こうがくしよ しんちく ・青松館が郷校と合併し伝習学校と称する (島森道義遺稿より)。 ・小中島 (今の本町) 漢学塾 (講学所青松館) を小中島学校と改称し創立、教師2名、児童90名。 (後の角間川小学校、当時の場所は不明) ・門の目村に雄東学校創立 (布晒分校前身) 児童31名。	われる。
1877年 (明治10年)		・西南戦争が起こる。
1878年 (明治11年)	くされまい ・県から腐米改良区に指定され、石川理紀之助が巡回指導にあたる。	
1880年 (明治13年)	・秋田腐米改良社設立。	
1881年 (明治14年)	こりんこう ・角間川に明治天皇御臨幸。	
1883年 (明治16年)	・小中島学校が角間川小学校と改称。	
1884年 (明治17年)	・喜福院、3度目の移動で今の場所に移る。	
1886年 (明治19年)	・布晒分校 (旧称雄東学校) 廃止。 (教育費節約の為)	
1887年 (明治20年)	・角間川高等小学校、角間川尋常小学校となる。	
1889年 (明治22年)		たいにっぽんていこけんぽうまつぶ ・大日本帝国憲法発布
1891年 (明治24年)	じんじょう ・角間川尋常高等小学校となる。	

--	--	--

【文教の町形成期 学問のまちづくりの頃～明治・大正・昭和～】

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1892年 (明治25年)	・角間川小学校4代目校長須田勇助、学校にて剣道を教える。(角間川剣道の始まり)	・軽工業の産業革命が起こる。 ・日清戦争 (～95年)
1894年 (明治27年)	・秋田改良社改め、平鹿銀行設立 秋田県最初の普通銀行。(本店角間川村、のちに支店4店、派出所2店)	
	・大洪水で学校浸水。(日記書類まぼ流出)	
1896年 (明治29年)	・大洪水で学校浸水。	
1899年 (明治32年)	・角間川小学校、四上町に移築改築、新築落成式挙行。	・重工業の産業革命が起こる。
1900年 (明治30年代)	・角間川・大保両港の隆盛に呼応して八圭の歓楽街栄える。	・日露戦争 (～05年)
1904年 (明治37年)		
1905年 (明治38年)	・飯詰調ができる。	
1907年 (明治40年)	・角間川小学校布晒分校復活。	
1910年 (明治43年)	・須田勇助先生、角間川小学校7代目校長として再赴任。文武に励むことを教育の中核とする。	・関税自主権を回復する。
1911年 (明治44年)	・角間川小学校布晒分教場新設。(改築?)	
1912年 (明治45年)		・第1次世界大戦が起こる。
1913年 (大正2年)	・電燈がつく。 東北地方、大冷害。	
1914年 (大正3年)	・強首大地震。 (前年の冷害と大地震で角間川町民困窮す)	
	・石川理紀之助、木内・布晒部落の救済事業にあたる。(小作人へ藁工品製作の励行、地主に救済事業への協力要請)	・関東大震災が起こる。
1923年 (大正12年)	・浄蓮寺当麻曼荼羅、国指定重要文化財に指定さ	

1925年 (大正14年)	れる。 ・平鹿酒造会社できる。	
1927年 (昭和2年)	・角間川小学校剣道部全県制覇。 (昭和16年まで連続制覇)	・世界恐慌が起こる。
1929年 (昭和4年)	・角間川全町青年団主催第1回全町盆踊り大会が開かれる。	・満州事変が起こる。
1931年 (昭和6年)		

年 代	角間川のできごと	日本のできごと
1934年 (昭和9年)	・角間川小学校剣道部 (高等科)、豊島師範学校 OB会豊道会主催の全国小学校剣道大会において 優勝。全県制覇し「輝武」の優勝旗を飾る。 ・小学校創立60周年祝賀。 (記念として剣道大会を行なう)	
1935年 (昭和10年)	・「武を練り、文を導く精神」の象徴として帽章 <亀の子>を制定。 ・早稲田実業主催第6回全国小学校大会にて優勝。 (参加校186校) ・豊道会主催全国小学校剣道大会に おいて優勝。 ・各市町村に郷倉設置。 ・柴田安子 (画家) 青竜展に「牧婦」出展。	
1936年 (昭和11年)	・横手川改修工事始まる。	
1937年 (昭和12年)		・二・二六事件が起こる。
1938年 (昭和13年)	・平鹿銀行、秋田銀行に合併。	・日中戦争始まる。(～45年)
1940年 (昭和15年)	・早稲田実業主催第11回全国小学校大会 優勝。 ・目白商業主催全国小学校剣道大会 優勝。	
1941年 (昭和16年)	・角間川町立角間川国民学校と改称。	・太平洋戦争勃発
1942年 (昭和17年)	・学校に講堂完成。(総工費4万2千数百円也)	
1945年 (昭和20年)	・7月25日明田地野飛行場建設中に真昼山方面より 飛来したグラマン3機より機銃掃射を受ける。	・ポツダム宣言を受け入れ

	8月15日終戦。	むじょうけんこうふく 無条件降伏する。
1947年 (昭和22年)	・角間川小学校と改称。中学校と分かれる ・角間川中学校ができる。	
1948年 (昭和23年)	・大曲農業高等学校角間川分校できる。	
1951年 (昭和26年)		・サンフランシスコ平和条約
1955年 (昭和30年)	・角間川町、大曲市に合併。	
1964年 (昭和39年)		・東京オリンピック・パラリンピック
1967年 (昭和42年)	・角間川盆踊りが大曲市無形文化財に指定。	
1968年 (昭和43年)	・全校竹刀振り運動始まる。(業間体育として)	
1969年 (昭和44年)	・小学校剣道全国大会三位。・内町に温泉湧く。	
1970年 (昭和45年)	・中町から元小学校講堂跡に公民館移転 ・大曲南中学校竣工。	
1972年 (昭和47年)		おきなわへんかん ・沖縄返還
1974年 (昭和49年)	・角間川小学校創立百周年。	



名 前	
-----	--